

授業のヒント

前回に引き続き会話の授業の教え方を取り上げます。今回は特に会話のストラテジーをどう教えるか考えてみましょう。

テーマ 会話のストラテジーを教えよう

目的・教えること
・会話のストラテジーを使って会話力を高める
学習者のタイプ
・初級・中級
クラスの数
・何人でも
準備するもの
・特になし

前号では、対話形式で言葉のやりとりをして、一つの会話を進めていく力を伸ばすための指導方法を紹介しましたが、今回は、会話のストラテジーを使いながらさらに会話が上達するための指導方法を取り上げることにします。

会話のストラテジーを考える

会話が上手になるためには、日本語を使ってうまくコミュニケーションを行う力を高めることが欠かせないでしょう。うまくコミュニケーションを行う力とは、相手の言ったことがわからなくても、確認したりして会話を続けていくことができる力のことです。

まず、下の会話文を見てください。

会話例1

A：はじめまして。わたしはマリオです。どうぞよろしく。

B：わたしは高橋です。こちらこそよろしく。

AとBは初対面で、お互いに自己紹介をしている場面での会話です。ここでは、AもBもともに自分の言いたいこと・初対面の挨拶、名前 - を伝え合っていて、AもBもそれを正しく受け取っているようです。

しかし、実際の日本語学習者の会話では、たとえ日本語の音声、文法、語彙、表現を十分に勉強していても、初めて会った人の名前を聞いてすぐ理解することは決してやさしいことではないはずです。

次の会話は教科書の会話文です。

会話例2 パーティーで/名前を聞く

マリオ：こんにちは。はじめまして。

高橋：あ、こんにちは。
マリオ：わたしはマリオです。どうぞよろしく。

高橋：は？
マリオ：マ・リ・オです。

高橋：マリオさん。
マリオ：そうです。あのう、お名前は？

高橋：わたしは高橋です。
マリオ：た・か？

高橋：た・か・は・し。
〔名刺を渡しながら〕どうぞ。

マリオ：どうも。高橋さんですね。

高橋：ええ、よろしく

『日本語入門 はじめのいっぽう』(p.32)

上の会話では、高橋さんは名前が聞き取れずに「は？」と聞き返しています。一方のマリオさんは名前が聞き取れた部分だけ「た・か？」と繰り返しています。

また、高橋さんもマリオさんも、もう一度名前を聞いた後で、それぞれ「マリオさん」「高橋さんですね」と言って、自分の受け取り方が正しかったかどうか確認しています。

その結果、高橋さんもマリオさんももううまく相手の名前を知ることができました。

私たちが母語で会話をするときには、なんとかコミュニケーションが成立するようにやりとりし、自分の言いたいことが伝わっているかどうか、また、相手が言いたいことを正しく受け取っているかどうか確かめながら会話を進めていきます。

このように、相手の言ったことを聞き返したり、確認したりするなど、会話がうまく進むように助ける手段のことを“会話のストラテジー”と呼びます。

会話のストラテジーは、機能の面から大きく次の2つに分けることができます。

会話のストラテジー

コミュニケーション上の障害が起こるのを避ける

例) わからない単語や文法を使わない
特定の話題や表現を避けて話す
わからなくても聞き流す

コミュニケーション上の障害を乗り越える

例) 知っていることばに置き換える
聞き流す
聞き取れた部分だけを繰り返す
もう一度/もっとゆっくり言うように頼む



日本語の語彙や文法の知識が十分でない学習者は、このような会話のストラテジーを使ってコミュニケーションに問題が生じるのを避けたり乗り越えたりする必要性が高いと言えるでしょう。

では、授業の中で具体的にどう教えたらいいか考えることにしましょう。

授業での応用

最近の研究では、よくできる学習者が使っているストラテジーは、他の人でも学ぶことができると考えられています。ここでは、授業に応用できる、いくつかの方法を紹介しましょう。

① 学習者同士で話し合う

私たちが母語でコミュニケーションを行うときには無意識に使っている会話のストラテジーがいくつもありません。それらの中には日本語で会話をするときにも役立つものがあります。

たとえば、会話の途中で意味がわからないことばがあったときにはどうしたらいいかなどについて話し合うと、学習者に会話のストラテジーを意識化させることができるでしょう。

初級レベルのクラスでは、学習者の母語で話し合ってもかまいません。

② ビデオやテープを利用する

会話例2のように会話のストラテジーを取り入れている教科書のテープ教材や市販のビデオ教材の会話を使う場合、視聴する前に、たとえば学習者に次のような質問を与えるといいでしょう。

- 相手の名前を聞いた後、高橋さんとマリオさんは何と言ったか
- 始めの部分しか聞こえなかったときどうしたか
- 自分の理解したことが正しいかどうか相手にどうやって確かめたか

ビデオやテープを使いながら、学習者の注意を会話のストラテジーに向けさせるようにすると効果的でしょう。

③ インフォメーションギャップを作る

お互いの言いたいことがわからない状況があって初めて、会話のストラテジーを使う必要性が生まれます。ペアで、あるいはグループで練習する場合にも、お互いの持っている情報がまったく同じではない状態、つまりインフォメーションギャップがある状況を作って練習させ

なければなりません。

たとえばペアで、それぞれ少し内容の違う地図を見ながら「__は__にあります」の文型を使って、道を聞く練習をする場合、次の例のように、同時に会話のストラテジーの練習ができるでしょう。

会話例3

A: あのお、すみません。郵便局はどこですか。
B: 郵便局...ええと、郵便局は、ブックス北浦和のとなりにありますよ。

A: ブック...

B: ブックス北浦和。

本屋ですよ。

A: ああ、ブックス北浦和のとなりですね。わかりました。どうも。

B: いいえ、どういたしまして。



④ ロールプレイをする

次のような、会話のストラテジーを積極的に使うような種類のロールプレイをしてみるといいでしょう。

ロールカード例1

A. あなたは新幹線の中にいます。荷物が多いので、友だちのBさんに電話をして、迎えに来て欲しいと頼みます。待ち合わせに必要なことを話してください。

B. あなたはAさんから電話を受けましたが、いつ、どこで待ち合わせると言ったのか、よく聞き取れませんでした。どうしますか。

『コミュニケーションに強くなる日本語会話』(p.74)

練習後の発表で、特にうまく会話のストラテジーを利用してペアをほめるようにすると、クラス全体の意欲もより一層高まることでしょう。

これで、会話の途中でつまずいたり、わからないことが起きたりしても、なんとか解決する準備は整いました。あとは、間違いを恐れずに、教室の内外でさまざまな人と日本語で会話をする機会を作ってみてください。

参考文献

- Ellis, R (1986) Understanding Second Language Acquisition. Oxford University Press.
- 目黒真実、勝間祐美子、濱川祐紀代、栗原毅(2001)『コミュニケーションに強くなる日本語会話』アルク
- ルービン、J. & トンプソン、J (1998) 『外国語の効果的な学び方』(西嶋久雄訳)大修館書店
- 谷口すみ子、萬浪絵理、稲子あゆみ、萩原弘毅(1995)『日本語入門はじめのいっぽ』スリーエーネットワーク

先日、インド・カルカッタのニガム和子さんからお手紙をいただきました。「俳句を作りましょう」(第39号)を参考に授業をしたとのこと。学生の作品を2つ紹介しましょう。

とりがなき きにはながさき ときははる
よがあけて にっこうけて きんのそら

お便りありがとうございます。他の皆さんからのアイデア、成功例、失敗談などもお待ちしております。

*このコーナーの担当者:有馬淳一、古川嘉子(日本語国際センター専任講師)